

マルコによる福音書 14章27-42 節 つまずきの先の救い

今日も私たちは、十字架での死を前にした生涯最後の日をイエス様と共に歩んで行きます。主は、裏切り者を指摘された、弟子たちとの最後の晩餐を終えられたばかりでした。

そして、主の晩餐を制定され、彼らのために犠牲を払うことに注意を向けさせました。今日のマルコの福音書14章27節から42節に至っても、弟子たちの思いはいまだにイエス様を裏切る者が誰であるかに集中しているようでした。ヨハネの福音書によれば、ユダはイエス様が主の晩餐を始める前に食卓から去っており、弟子たちはユダが何かをしようとしていることに気づいてはいたと思われませんが、それが何なのか知る由もありませんでした。しかし、彼らの頭の中は裏切りの可能性についてでいっぱいでした。

イエス様は、彼ら全員を根底から揺さぶるようなことを言われます。彼らは自分たちをイエス様の弟子として完全に全身全霊で尽くしていると考えていたからです。しかし、イエスは弟子たちに、彼らの主への献身が不十分であることを告げられます。27節から読み始めましょう。イエスは弟子たちに、彼らの信仰の弱さを警告されます。**イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、つまずきます。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散らされる』と書いてあるからです。28**しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」**29**すると、ペテロがイエスに言った。「たとえ皆がつまずいても、私はつまずきません。」**30**イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。まさに今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います。」**31**ペテロは力を込めて言い張った。「たとえ、ご一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」皆も同じように言った。

使徒パウロはコリント人への手紙一10章12節で教会にこう警告しています。**12**ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。そして弟子たちは本質的に、パウロが警告している人々と同じ立場にいました。弟子たちは、イエス様が彼らをどこへ導かれようとも、彼らは主に従わないだろうと言うイエスから聞いた話を信じることができなかったのです。

イエス様がここで言っているのは、彼らがイエス様への信仰を捨てることや、ユダがしてしまったような、イエス様の指導と権威に対する意図的な罪深い反抗をすることかということではありません。そうではなく、主が言っているのは、信仰における罪深い過ちやつまずきのことであって、反抗のことではありません。私たちのほとんどが多くの場合犯しているのはこの罪です。私たちは神に対するあからさまな反抗行為を行っているわけではありませんが、そのような行いをしてしまっている場合もあります。しかし、私たちの罪のほとんどは、弱さと勇気の欠如による罪です。私たちは罪を犯すつもりはありませんが、信仰に堅く立つことができず、罪を犯してしまうのです。しかし、イエス様は弟子たちが時として、私たちと同じように心が主から離れてしまうことがある事を知っていても、イエス様は弟子たちの躓きを見捨てることはないと言明していることに注目してください。イエスがどのように表現しているかに注目してください。

主はゼカリヤ書13章7節を引用しています。**ゼカリヤ書 13章 7節**

7剣よ、目覚めよ。わたしの羊飼いに向かい、わたしの仲間に向かえ——万軍の主のことば——。羊飼いを打て。すると、羊の群れは散らされて行き、わたしは、この手を小さい者たちに向ける。

この節のフレーズの全文脈を見ることが重要です。イエス様がこの句を引用されたとき、『わたしは羊飼いを打ち、羊は散らされる』と言い換えられたからです。イエス様は「打て」という命令を「わたしが打つ」と変えておられます。これは、羊飼いが御自身の羊飼いであると言われていたのが万軍の主である神であるという文脈を考えれば納得がいきますが、その神が**羊飼いを打て**と言われていたのです。新約聖書で旧約聖書の引用を読むとき、多くの場合、読者がその引用の文脈を知り、その特定のフレーズだけでなく、文脈全体を適用することが期待されています。この場合、ゼカリヤ書13章は、神の民にもたらされる罪からのきよめについて述べています。その方法は、殺された羊飼いを通してであり、その羊飼いが死ぬように定められるのは神御自身です。イエス様は、御自身が罪の償いのために神が打ち殺すことを定められた羊飼いであることを明確に語っているのです。さて、このことと、弟子たちが躓く中でのイエス様の弟子たちへの約束と、どのように結びつくのでしょうか。もし、救い主との繋がりが弟子たちの業で得たもので

あったなら、彼らの躓きは救い主の拒絶、つながりを失うこととなったでしょう。しかし、もし私たちがイエス様に従っているのが、神御自身が私たちに救いに導くために私たちの心に働いてくださったからであるなら、私たちがどれだけ躓いてもイエス様に拒絶されることはありません。そこでイエス様は、罪からの救いのために神の定められた御計画によって御自分の死を指摘された直後に、淡々とこう言われます。**しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。**その頃には弟子たちが御自身を拒絶していることは知っておられますが、死からよみがえった後、彼らを待っておられるのです。打ち倒された後によみがえるというこの確信自体、信じられないことです！しかし、弟子たちに対する主の約束を考えてください。主は弟子たちが彼を裏切った後でも、彼らを待っておられるのです。これが私たちの主イエスです！弟子たちと同じように、私たちは何度も何度も主を裏切っていますが、それでも主は私たちに待っていてくださるのです。主は私たちと共におられ、それでも父なる神のもとに行き、私たちが主イエスの弟子の一人であり、イエス様御自身がなされた犠牲に基づいて赦されていることを確認されるのです。そして、イエス様がすでに暗示されたように、その関係を可能にするためにイエス様を十字架に遣わしたのは、父なる神御自身の永遠の計画と目的であったのです。その考えは32節から36節でイエス様が祈る中で再び見られますが、その前に29節で弟子のペテロを見なければなりません。マルコの福音書は、ペテロによるイエスの生涯の記述であることを思い出してください。ペテロは、彼を漁師の生活からイエス様に従う生活へと召してくださったこのイエス様が、彼の人生を変えてくださったことを、この記録を読むすべての人に明らかにしたいのです。もし私が自分の人生を語るとしたら、人生最大の失敗を語りたとは思いませんが、ペテロはそれを語ろうとしているのです。そして、この躓きを知ることは重要です。なぜなら、マルコ書の終わりは、この大きな躓きの後、イエス様がそれでもペテロを弟子として求めておられることを、ペテロがただ覚えていたからです。この後、2度ほど戻るマルコの福音書16章7節で、天使はこう言っています、**7さあ行って、弟子たちとペテロに伝えなさい。『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、ここでお会いできます』と。**なぜペテロは、自分の躓きがどれほど大きなものであったかを私たちに知らせたいのでしょうか？救い主からの赦しがどれほど憐れみ深いものであったかを私たちに知ってほしいからです。ですから、イエス様は30節でペテロにこう答えられています、**「まことに、あなたに言います。まさに今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います。」**そして、いつも生意気で、やや傲慢だが勇敢な弟子であるペテロは、31節でこう言っています。**たとえ、と一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。**ペテロは他の弟子たちと同様に、この約束を果たせずに無残に躓きますが、その失敗の後でも、ガリラヤでイエス様に会うよう特別な招きを受けます。イエス様は間違いなく善良なお方でしたが、このレベルの赦しは、主が善良な人間であったからもたらされたものではありません。この赦しは、弟子たちがイエス様の死後もイエス様との関係続けるに相応しいからもたらされたのでありません。彼らはそれに値しませんでした。この赦しがもたらされるのは、イエス様がこの弟子たち、そしてイエス様に従うすべての人たちを、最も大きな躓きである聖なる神に対する罪から救うために、御父の御心に従うことを約束されているからです。この箇所では、弟子たちの決意の弱さが、御子なる神と父なる神の彼らの救いへの揺るぎない決意と対比されています。イエス様の約束を果たすための従順な祈りを32-36節で見ましょう。**32さて、彼らはゲツセマネという場所に来た。イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい。」33そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを一緒に連れて行かれた。イエスは深く悩み、もだえ始め、34彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、目を覚ましていなさい。」35それからイエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、できることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈られた。36そしてこう言われた。「アバ、父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。」**このテキストは、今日は徹底した議論をする時間がないほど、深い神学論争に入り込んでいきます。しかし、この箇所から読み取れることは、イエス様御自身の本質を思い起こすときに初めて理解できます。教会の歴史は、その初期の信条と告白において、イエス様が完全な神であると同

時に完全な人であり、イエス・キリストという一人の人格の中に二つの性質を持っていることを確認してきました。これは西暦451年のカルケドン公会議におけるカルケドン信条に完全に具体化され、そこでイエス様は「位格的結合」と呼ばれるものを持つという考えが形成されました。これは神学用語で、イエス様の2つの性質、神性と人性の合一、人格的結合を意味します。

つまり、Desiring Godの記事にある単純な定義によれば、「位格的結合とは、イエスという一人の人格において、神と人が神秘的に結合することである」。もちろん、この二つの性質という考えは聖書そのものに基づいています。私たちはイエス様は神であると知っています。ヘブル人への手紙 1章 3節はこう教えています。 **3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。**ヨハネ書 1章 1節はこう言っています。 **初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。**

新約聖書には他にもイエスの神性に関する記述がたくさんあります。しかし、イエスの完全な人間性についても言及されています。ピリピ人への手紙 2章 7節などの聖句は、次のように伝えています。 **7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、ヨハネ書1章 14 節にもあります。 14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。** また、ヘブル人への手紙4章15節を見ると、誘惑を受けることができる彼の人間性を見ることができます。 **15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした。すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。**

なぜこれらの聖書の文章が重要なのでしょうか。なぜなら、このテキストを読むと、人であるイエス様が、その人間性に対する父なる神の御心と葛藤しているのがはっきりと見えるからです。ここで、私たちは神学においてとてつもない間違いを犯す可能性があり、それはカルケドン公会議が取り組んでいた疑問の一つでもあります。神には二つの御心があるのでしょうか？イエス様が神であることはすでに聖書で見たとおりです。ならば、どうして御父の御計画に少しでも疑問を持つことができるのでしょうか？その答えは、カルケドン宣言に示されているとおり、イエス様は神の御子でありながら、人間と神という二つの性質を持っています。つまり、イエス様は完全な人として人間的意志を持ち、完全な神として神的意志を持つということです。さて、その神の御心は、永遠以前から、御父なる神、聖霊なる神と同じ御心であったのです。

三位一体としての神は、ただ一つの御心をお持ちです。神は三位一体であり、御父なる神、御子なる神、聖霊なる神の三つの位格は一つの意志を共有しておられます。しかし、イエス様は完全に人間でなければならず、その完全に人間であるイエスは、十字架上で死ぬときに罪のない者となるために、神の御心に完全に服従する必要があったのです。だから私たちは、神の御心に完全に服従する人間イエスを見るのであり、その一方で、私たちの誰もが経験するような、イエス様が御自身の死について知ったときの人間としての自然な反応も経験されているのです。イエス様は父なる神の助けが必要であり、それを受ける唯一の方法は祈りであることを知っておられました。あなたも私も、人として人生で最も困難な時に直面するとき、神の助けが必要であると認識しているのでしょうか？イエス様の反応は、十字架から逃げることで、十字架を心配して手を震わすことでもありませんでした。イエス様の反応は、素直な感情で唯一の避けどころである神に向かう事でした。34節で主の心情を見てください。 **34 彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、目を覚ましていなさい。」**そして、35節の祈りは、

できることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈られた。

神の御子は、まさにこの時と計画に永遠に同意されました。しかし今、人であるイエス様は、これから起こることを知っておられ、恐れと苦しみをたくないという素直な感情を示されました。しかしその後、イエスが十字架に直面する準備を完全に整えるために何が起こったかに注目してください。イエスの人間としての意志は、その苦しみの杯が何をもたらずかを知っていようと、神の御心に完全に従順でした。この時、イエスは祈りを締め括っていますが、36節で同じ祈りを何度も繰り返しておられることがわかります。 **アバ、父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。**

アッパという言葉はヘブライ語で父を意味する言葉ですが、お父さん、あるいはパパというような親しみを含んでいます。この言葉は、イエス様が御父なる神との関係や御自分に対する神の愛を疑わなかったことを示しています。これは、私たちが直面している困難な状況の中で平安を見出そうと祈りで奮闘するとき、私たちが着地すべき場所と同じです。私たちは、神には全てが可能であると言う、神の主権的な御力を認識する必要があります。そして、神は状況を変える力を持っておられますが、たとえ神の目的と最終的な神の栄光のために困難な状況を通過することを意味するとしても、私たちの意志が神の御心に沿うことを望みます。しかし、この時、イエス様の人間性が切望したもう一つの必要がありました。人であるイエス様は、弟子たち、つまり地上で最も親しい3人の友人が、この時、イエス様と共にいて、共に祈ってくれることを必要とされていたのです。しかし、イエス様が御父の御心に従順であられるにもかかわらず、弟子たちは主への献身に欠けていました。最後の37-42節を見てください。 **37 イエスは戻り、彼らが眠っているのを見て、ペテロに言われた。「シモン、眠っているのですか。一時間でも、目を覚ましていられなかったのですか。 38 誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」 39 イエスは再び離れて行き、前と同じことばで祈られた。 40 そして再び戻って来てご覧になると、弟子たちは眠っていた。まぶたがとても重くなっていたのである。彼らは、イエスに何と言ってよいか、分からなかった。 41 イエスは三度目に戻って来ると、彼らに言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。 42 立ちなさい。さあ、行こう。見なさい。わたしを裏切る者が近くに来ています。」**

このゲッセマネの園での祈りの時は深夜に始まり、早朝に終わったので、弟子たちは疲れていました。イエスは弟子たちに、死を前にした苦悩と情動の中で祈りに加わることを望まれていたのです。しかし、弟子たちはそれができませんでした。マルコを通して、ペテロが躓いた者たちの一人であること分かるようもう一度確認していることに注目してください。彼は、使徒の働きの書で教会が始まる時に、私たちが見た霊的な巨人ではなかったのです。しかし、イエスは失望しながらも、はっきりとこう述べています、 **霊は燃えていても肉は弱いのです。**

躓いたにもかかわらず、弟子たちの心を見て、彼らの心からの嘘のない決心を知っておられるのです。あなたは、弟子たちは3回も起こされれば、何とか眠りこけずに起きて祈る方法を見つけるだろうと思いませんか.....立ったり、歩き回ったり、詩篇を歌って祈ったり。しかし、彼らはその後も眠りに落ちてしまいました。しかし、この躓きにもまた、救い主がこの関係を持ち続け、最も困難な時に彼らをそばに置いておかれることを望まれたことを見ます。しかし、間もない後に、彼らはイエス様から逃げ出すのを目の当たりにします。今日、私たちは弟子たちと同じ状況に置かれています。私たちは、祈りのために時間を費やす必要があること、毎日生き抜くためにイエス様との関係に目を向け、それを保つことが不可欠であることを知っています。それなのに、私たちは気が散ってしまったり、弟子たちのようにただ疲弊してしまい、祈りが短くなったり、祈らなかつたり、神の御言葉に浸る時間が日曜日の朝だけに追いやられてしまったりします。私たちが献身に疲れ果て、たとえ従うべきことに従えなくなっても、私たちを救おうとする神の御心に従順であり続けられた主に仕え、私たちへの約束を必ず果たされるという事実には希望があります。神の目的のために献身し続けるために、私たちの意志がキリストの御心と一致するように努められますように。救い主イエス様の祈りが私たちの祈りとなりますように、 **しかし、わたしの望むのではなく、あなたがお望みになることが行われますように。**

そして同時に、私たちが躓いても、イエス様は決して私たちを見放されないという事実を慰めと励ましに、神に賛美を献げましょう。祈離しましょう。

Mark 14:27-42 Commitment in the face of failure

Today we continue to walk with Jesus through the final day of his life before the cross. He has just finished his last supper meal with his disciples where he pointed out his betrayer. And then he pointed their attention to his sacrifice he would make on their behalf as he instituted the Lord's Supper. As we come to today's passage in Mark 14:27-42, the disciples thoughts are likely still on the one who will betray Jesus. We know from the Gospel according to John is that Judas had actually left the Supper before Jesus instituted the Lord's Supper, and it seems likely that the disciples may have realized that he was going to do something but they didn't know what. But all their minds are on the possibility of betrayal. Now, Jesus says something that will shake all of them to their core, because they see themselves as fully committed disciples of Jesus. But Jesus will tells them that their commitment falls short. Let's begin reading at verse 27 where Jesus warns his disciples of the weakness of their commitment. ²⁷ And Jesus said to them, "You will all fall away, for it is written, 'I will strike the shepherd, and the sheep will be scattered.' ²⁸ But after I am raised up, I will go before you to Galilee." ²⁹ Peter said to him, "Even though they all fall away, I will not." ³⁰ And Jesus said to him, "Truly, I tell you, this very night, before the rooster crows twice, you will deny me three times." ³¹ But he said emphatically, "If I must die with you, I will not deny you." And they all said the same.

In 1 Corinthians 10:12, the Apostle Paul warns the church that, "Therefore let anyone who thinks that he stands take heed lest he fall." And the disciples essentially find themselves in the same position as the people that Paul is warning. They cannot believe what they are hearing from Jesus, that they would not follow him no matter where his leading took them. Now, Jesus is not saying here that they would fall away from their faith in him or that they would commit willful sinful rebellion against his leadership and authority which is what Judas would do. No, what he is talking about is a sinful lapse or stumble in their faith, not rebellion. This is where most of us are the most guilty of sinning. We are not committing acts of outright rebellion against God, although we certainly do those things as well. But most of our sins are sins of weakness and failures in courage. We do not plan on sinning, but we also fail to stand firm when we should, and we end up sinning. But notice that even though Jesus knows the disciples will fall away as will we at times, Jesus makes clear that he will not forsake them in their failure. Notice how Jesus frames this. He quotes from Zechariah 13:7 which says, Awake, O sword, against my shepherd, against the man who stands next to me," declares the Lord of hosts. "Strike the shepherd, and the sheep will be scattered; I will turn my hand against the little ones." It's important to see the full context of the phrase in this verse, because when Jesus quotes it, he changes it to, 'I will strike the shepherd, and the sheep will be scattered. Notice that Jesus changes the command Strike to I will strike. This makes sense in the context where it is God, the Lord of Hosts saying that the shepherd is his own shepherd and yet, it is God saying, "strike him down." Many times when you read Old Testament quotations in the New Testament, there is an expectation that the reader would know the context of the quotation and apply the entire context to what is said and not just that specific phrase. In this case, Zechariah 13 is about a cleansing from sin that will come to the people of God. The way it will happen is through a slain Shepherd, and it will be God himself who ordains that Shepherd to die. Jesus is clearly saying that he is the shepherd who God has ordained to be struck down to pay for sin.

Now how does this connect with his commitment to the disciples even in their failure? If the disciples connection to the Savior was their own doing then falling away from him would result in rejection, but if we are following Jesus because God himself has worked in our hearts to bring us to salvation then we cannot fully fall away and have Jesus reject us. So, right after Jesus pointing out his death by the ordained plan of God for salvation from sin, Jesus matter of factly states, **But after I am raised up, I will go before you to Galilee.**” He knew they will have rejected him by that time, but he will be waiting on them after he rises from the dead. This certainty that he will be raised after being struck down is incredible in itself! But think about his commitment to the disciples. He will be there for them waiting even after they fail him. This is our Lord Jesus! The fact is that like the disciples we fail him over and over, and yet he waits for us. He stays with us and still goes to God the Father affirming to him that we are one of his disciples who have been forgiven based on the sacrifice that he himself made. And as Jesus has already hinted at, it was God the Father himself in his eternal plan and purpose that sent Jesus to the cross to make that relationship possible.

We see that idea again as Jesus prays in verse 32 – 36, but before we get there, we must look at the disciple Peter here in verse 29. Remember that Mark’s gospel is Peter’s account of Jesus’s life. Peter wants to make clear for everyone who reads this account that this Jesus who called Peter from a life of fishing to a life of following Jesus has changed his life. If I was going to tell my life story, I’m not sure I want to share the greatest failure in my life, but that is what Peter is going to give us. And it is important to see this failure, because the end of the book of Mark is Peter simply remembering that Jesus still wants him as a follower after this failure. In **Mark 16:7**, which we will come back to at least two more times, the angel says, **7 But go, tell his disciples and Peter that he is going before you to Galilee. There you will see him, just as he told you.**” Why does Peter want us to know how great his failure was? Because he wants us to see how great his forgiveness was from his Savior. So, Jesus responds to Peter in verse 30, **“Truly, I tell you, this very night, before the rooster crows twice, you will deny me three times.”** And Peter, always the cocky somewhat arrogant but bold follower says in verse 31, **“If I must die with you, I will not deny you.”** Peter just like the rest of the disciples will fail miserably in this commitment, but still receive a special invitation to join Jesus in Galilee after that failure.

This level of forgiveness did not come because Jesus was just a good human being, although he certainly was. This forgiveness did not come because the disciples deserved a continued relationship with Jesus after his death; they did not. This forgiveness will come because Jesus is committed to following his Father’s will in order to save these men and all who follow him from their greatest failures, their sin against a holy God. **The weakness of the disciples commitment is contrasted in this passage with the commitment of God the Son and God the Father to their salvation.** Let’s see that commitment in verses through verses 32-36. **³² And they went to a place called Gethsemane. And he said to his disciples, “Sit here while I pray.” ³³ And he took with him Peter and James and John, and began to be greatly distressed and troubled. ³⁴ And he said to them, “My soul is very sorrowful, even to death. Remain here and watch.” ³⁵ And going a little farther, he fell on the ground and prayed that, if it were possible, the hour might pass from him. ³⁶ And he said, “Abba, Father, all things are possible for you. Remove this cup from me. Yet not what I will, but what you will.”** This text gets into some deep theological debates that I don’t have time to discuss in depth today. But

what we read in this passage is only understandable when we are reminded of the nature of Jesus himself. Church history in its earliest creeds and confessions has affirmed that Jesus is both fully God and fully man, having two natures in the one person of Jesus Christ. This was fully fleshed out in the Chalcedonian Creed in 451AD at the Council of Chalcedon where the idea of Jesus having what they called a “hypostatic union” was formed. This is the theological term for the personal union of Jesus’s two natures. So, the simple definition from an article on Desiring God tells us that “The hypostatic union is the mysterious joining of the divine and the human in the one person of Jesus.” Of course this is idea of two natures is based on Scripture itself. We see that Jesus is God. [Hebrews 1:3](#) tells us that “[He \[Jesus\] is the radiance of the glory of God and the exact imprint of his nature...](#)” [John 1:1](#) tells us, “[In the beginning was the Word \[Jesus\], and the Word was with God, and the Word was God.](#)” There are many other references to Jesus’s divinity throughout the New Testament as well. But then we have the references to the full humanity of Jesus as well. Scriptures like: [Philippians 2:7](#) that tell us [\[Jesus\] ...emptied himself, by taking the form of a servant, being born in the likeness of men.](#) We can also go to [John 1:14A](#) [And the Word became flesh and dwelt among us...](#) And see his humanity in his ability to be tempted when we look at [Hebrews 4:15](#) [For we do not have a high priest who is unable to sympathize with our weaknesses, but one who in every respect has been tempted as we are, yet without sin.](#)

Why is all this important to this text of Scripture? Because when we read this text, we clearly see Jesus in his humanity struggling with God the Father’s will for his humanity. Now here is where we can make a tremendous mistake in our theology, and it is one of the questions that the Council of Chalcedon was addressing. Does God have two wills? We already saw from the Scripture that Jesus is God, so how can he question His Father’s plan to any degree? The answer is the one given in the Chalcedon declaration that Jesus is two natures, human and divine in the one Son of God. That means that as fully human, he has a human will, and as fully God, he has a divine will. Now, that divine will from before eternity has been the same will as God the Father, and God the Holy Spirit. God as a Trinity only has one will. God is THREE persons in ONE God – A Trinity, and those three persons, Father Son and Spirit share one will. But Jesus had to be fully human and that fully human being needed to fully submit to God’s will in order to be without sin when he died on the cross. So, we see the human Jesus who fully submits to the will of God, while experiencing the natural human reaction to the knowledge of his death that any of us would have.

Jesus knew that he needed God the Father’s help, and only way to receive it is through prayer. Do you and I recognize that when we face the hardest times in our lives as humans that we need God’s help? Jesus’s response was not to run away from the cross, or to shake his hands in worry about the cross. His response was to run to God in honest emotion. Look at his heart in verse 34, [My soul is very sorrowful, even to death.](#) And then his prayer in verse 35 where he [prayed that, if it were possible, the hour might pass from him.](#) The Divine Son of God had agreed in eternity to this very hour and plan, but now the human Jesus was showing his honest emotions of fear and desire to not suffer as he knows what is coming. But then notice what happens to fully prepare Jesus to face the cross. Jesus’s human will is fully committed to God’s will no matter even knowing what that cup of suffering will bring. He closes his prayer at this time, and we will see he prays the same prayer over multiple times with the words of verse 36.

“Abba, Father, all things are possible for you. Remove this cup from me. Yet not what I will, but what you will.” The word Abba is the Hebrew word for father, but it carries a closeness, like the word papa or maybe daddy. It shows that he never doubted his relationship with God the Father or His love for him. This is the same place where we need to land as we struggle in prayer to find peace in the difficult situation we face. We need to recognize the Sovereign power of God, that all things are possible with him. And that while he has the power to change the circumstances, we want our wills to be conformed to his will even if that means going through the difficult circumstances for his purpose and ultimately his glory.

But there was another need that the humanity of Jesus craved in this time. Jesus the human needed his disciples, his three closest friends on earth to be with him and pray with him during this time. But in the face of Jesus’s commitment to the Father’s will, **the disciples lack of commitment to their Lord becomes very clear as these friends fail him during this time.** Look at the final verses 37-42. ³⁷ And he came and found them sleeping, and he said to Peter, “Simon, are you asleep? Could you not watch one hour? ³⁸ Watch and pray that you may not enter into temptation. The spirit indeed is willing, but the flesh is weak.” ³⁹ And again he went away and prayed, saying the same words. ⁴⁰ And again he came and found them sleeping, for their eyes were very heavy, and they did not know what to answer him. ⁴¹ And he came the third time and said to them, “Are you still sleeping and taking your rest? It is enough; the hour has come. The Son of Man is betrayed into the hands of sinners. ⁴² Rise, let us be going; see, my betrayer is at hand.” This time of prayer in the garden of Gethsemane started late at night and ended early in the morning, and the disciples were tired. Jesus wanted them to join him in his agony and emotion before his death in prayer. And yet they failed in that. Notice that Peter through Mark makes sure that once again, we know that he is among those who fail. He was not the spiritual giant that we see as the church begins in the book of Acts. But notice that while Jesus is disappointed, he makes clear in his statement, **The spirit indeed is willing, but the flesh is weak**, that he sees their hearts and knows their commitment in spite of their failure. You would have thought after three times that the disciples would have found some way to stay awake and pray...perhaps stand, walk around, sing a psalm in prayer; but no, they still fell asleep every time. But again in this failure, we see the Savior continuing to choose to have this relationship and keep them close during the most difficult times, even though as we will soon see, they choose to run away from him. Today, you and I find ourselves in the same situation as the disciples. There are so many times that we know we need to just spend time in prayer...we need to turn into and towards our relationship with Jesus to make it day by day through our lives. And yet we find ourselves distracted or like the disciples just tired and worn out, and our prayers become short or absent, and our time in God’s Word is relegated to Sunday morning. There is hope in the fact that when we grow weary in our commitment and even fail to follow as we should, we serve a Lord who never failed in his commitment to God’s will to save us, and he will never fail in his commitment to us. May we seek to have our wills aligned with Christ’s will to stay committed to God’s purpose. May our prayer be that of our Savior, Jesus, **“not what I will, but what you will.”** And at the same time, take comfort and give praise to God for the fact that when we fail to do that, Jesus will never give up on us and let us go. Let’s pray.